

The call of summer

この本は、読み手の選択によってストーリーの展開と結末が変わるゲームブックです。

マルチエンディングは6種類。その内のいくつかに、さらに追加 ED があります。

トゥルーエンドやバッドエンドの概念はありません。

CP は伊奈スレです。

本編以外にも、DVD 特典のキャラクターも登場します。

Prologue

「さむ……」

制服のサマーセーターの襟元を掻き寄せ、肘の辺りを両手で擦る。無意味な動作だが気持ちは紛れる。頭上を見ると、カンカン照りの太陽があり、道の向こうは陽炎が立ち揺れている。当たり前の夏の光景。それなのに大気ばかりが冷気を纏い肌からじわじわ熱を奪う。

夏だというのに、この寒さはどういうわけだろう。

夏の日向と日陰の境界線を履き込んだローファーが越えた。

——ジッ、ジジッ……、ジー……——

「……え？」

学校帰りの高架下。界塚伊奈帆は思わず周囲を見渡す。濃い影の下。水面はピンと静かに張り詰め、煉瓦壁は湿り気を帯び暗色だ。前も後ろも、右と左も。誰もいないように見える。

——レ……レ……イ——

「誰？」

腰を落とし警戒する。位置がはっきりしない。ノイズ混じりの、頭蓋に直接響く音声になぜか聞き覚えがある。

——イ……イ……イ——

ジャリ、と靴裏に砂が擦れた。その刹那。

「……わっ！」

底が抜けた。周りの景色がスライドみたいに上に消え、踏みしめるものが無くなった。足元から風が起こる。衣服がはためき、空気抵抗で手脚が広がる。見開いた目に最後に見えたのは高架橋の継ぎ目の金具。ノイズが消えて暗闇にはっきり聞こえたのは——。

——ソコニイル？——

The call of
summer

0

目を開けたが、暗闇だった。

「……」

伊奈帆は、尻餅をついたまま状況を整理する。手のひらが触れる床の感触は丸い石を敷き詰めており冷たく硬く、水に濡れて湿っている。床に接した部分の服も濡れ、肌に張り付いて気持ちが悪い。

「……」

伊奈帆は物音を出さないように気をつけて、床を手で押し片膝をついた姿勢で鞆を前側にして肩にかける。ジッパーを片手で押さえ、ゆっくりと引く。タブレットを取り出した。スイッチを押すが、何の反応もない。明かりになればと考えたのだが。連絡も取れないことが分かった。

「……」

しゃがんだ姿勢で腕を伸ばし、慎重に移動する。濡れた靴下が靴の中で水音を立てた。

ほんの少し水が張った床がピチャ、と足音を刻む。それに対して、周囲になんの反応もない。そのことに若干ほっとしつつ、伊奈帆は歩幅を大きくし壁を探す。

「……あった」

右手が硬い壁に当たった。あまりの安堵につい声が出る。床と同じ素材のつるりとした石。壁を支えに立ち上がる。左手を接したまま、右手を前に伸ばした状態で、歩幅をカウントしつつ歩く。

……1203' 1204' 1205' 1206……。

「ん？」

伊奈帆は後ろ足に2歩戻る。1204 歩のところで、左手が触れる石の感触が変わった。ざらついた、手のひら大の正方形の箇所がある。

ガコン。

押してみると、奥に動いた。

「……こういうのって、隠し通路とか出るんじゃないの？」

何も起こらない。ついばやいてしまった伊奈帆は、気を取り直し方向転換した矢先。
ポツ、ポツ、ポツ……………。

石の一部が順繰りに青く発光し出し、平行線を床に描いた。まるで道のように見える。「なるほどね」

天井が幾何学模様が発光しているため、今いる場所の様子も分かった。向こう側の壁の見えないくらい広い、ドーム型の天井を待つ巨大な部屋だ。道の先はどこかに通じているのだろうか。

「壁伝いに行っても、道があるかもしれないな」

——ソコニイル？

——そこにいる？

高架下で聞こえた声が気にかかる。聞き覚えのある声だ。そして、そこにいる？ って問いかけ。

誰のことを指して？

理屈はないが、探さなければ、と思う。声の主も。いない誰かも。

伊奈帆は視線を左右に向けた。

「さて、どちらに行こうか」

壁伝いに歩く

↓

2

p.12

道を進む

↓

1

p.10

「こっちにしよう」

伊奈帆は壁から手を離し、光る石の道を歩き出す。水面がぼんやり青く染まる様は、こんな状況でなく、例えばアトラクションなんかだったら、中々気が利いている。

何度か方向転換をして、やがて壁が見えてきた。

「……あれは、人？」

道の行き着く所に、人影が見えた。暗いので顔のあたりはよく見えない。用心して近づいていく。

近くまで行くと、姿がはっきり見えた。大人の男性だ。見覚えはない。

「あなたは誰？」

伊奈帆が聞くと、男は小さく微笑んだ。

「君のほうこそ。何者だ？」

は ぐ ら か す	名 乗 る
↓	↓
4	3
p.19	p.14

「トラップかもしれない」

伊奈帆は再び壁伝いに歩き出す。天井からの淡い光があるだけで、随分と歩きやすい。

[8559、8560、8561……]

そこで伊奈帆は立ち止まる。8562 歩目にして、再び石の素材が違う場所を見つけた。

「今度は、何が起ころうかな」

独り言が多くなってきたな、と自己分析しつつ、伊奈帆はざらざらとした石を押す。

ガコン、ガ、カタカタカタカタカタカタカタカタ——。

奥の方で奇妙な音がする。音が遠のき、静寂が訪れた刹那。

閃光。思わず目を瞑る。

「……うわっ!？」

思わず伊奈帆は声を上げた。周囲の景色がガラリと変わっていたからだ。

金属でできた床と天井。黄白色の球体ライトが並ぶ壁面。強烈な光が照り返し、暗闇

に慣れていた目が再び閉じそうになる。

なんだろう、ここ。どこかの研究施設だろうか。

「誰？」

声がして、振り向くとそこには。

男性がいた ↓ 5

p.23

女性がいた ↓ 6

p.27

「界塚伊奈帆です」

「……伊奈帆だって？」

男が足早に近寄り、伊奈帆の両肩を掴んだ。

「わ、何ですか」

警戒していたのに、気づくと間合いの中にいた。只者ではない。至近距離でまじまじと、必死の面持ちで伊奈帆の顔を見つめている。日系の骨格に、濃い茶髪の癖毛。年齢は中年に差し掛かるくらいか。精悍な顔立ちの額や頬に白く残る傷があった。

「姉がいるな？」

絞り出すような声に心臓が早鐘を打つ。黄色がかった瞳が一心に伊奈帆を見つめている。

「名前はユキだろう」

肩を掴む手指が食い込む。伊奈帆はその手を腕でゆっくりと払い、一步後ろに足を引

く。

「……どうして、僕らの名前を知ってるんですか」

男が着ているのは、よく見れば軍服だ。階級は中佐。彼は直立し、額に手を当て敬礼する。

「地球連合軍宇宙軍中佐界塚実奈茂であります」

初め音が認識され、次に文字に変換される。そしてそれぞれの言葉が意味をもち、伊奈帆の意識に届いたのは体感にして数秒後。

「界塚……実奈茂……？」

気づくと、男の名前を呟いていた。写真は全部焼けてしまった。書いたものも、残したのも何もない、宇宙のどこかで死んだ男がそこにいる。

実奈茂はくしゃりと頬に皺を寄せ笑った。

「細かいことを置いておけば、僕が君の父親だ。だから名前を知ってる」

伊奈帆は言葉を失い、父の顔を刻むようにじっと見つめた。いないのが普通だった。周りはその子どもばかりだったし、何より生きるのに忙しかった。だから、深刻に考えたこともなかった。

父がどんな人間で、どのように生き、どのように死んだのか。

「大きくなったなあ。いくつだい？」

数歩の距離は、父子にしては遠いのだろうか。近いのだろうか。

「十五」

「中学生か？」

「高一」

伊奈帆の方は、ぶっきらぼうな、ひどく短い返答になる。実奈茂は苦笑いをして、そうか、と独り言ちる。

「この場所は、曖昧だ。何もかもがね」

そして、相槌の必要ない語り口で話し出す。彼の目が、周囲をぐるりと見回した。青い光に光る石。それらの断続的な点滅は、命を持った生き物のようにも見える。

「生と死をはじめ、時間や世界。あらゆる境界が、曖昧だ」

そして実奈茂は伊奈帆の側へ歩み寄る。

「君はまだ、ここに来るべきではないな。伊奈帆」

父の手が、ぽん、と伊奈帆の肩を叩く。

「帰る道は、私にはわからない。だが、君なら見つけれれる」

「どういうこと？」

「ここは君の場所じゃない。不穏分子は排除される」

瞬間、ぐにやりと空間が歪んだ。伊奈帆の周りに巨大なシャボン玉のような膜が現れ、実奈茂の顔がぼやけて徐々に薄らいでいく。

「父さん……！」

手を伸ばす。実奈茂が顔を近づける。これが最後だ。最初で最後の父との会話だ。な
らば。

「父さん！」

伊奈帆は声をかぎりに叫ぶ。

「どうして死んだんだ！」

ぐにやぐにやの視界で、声もまともに音にならない。伝わっているかわからない。実
奈茂の手が断絶をくぐり、伊奈帆の二の腕を掴む。

「天落つるとも、正義を為せ」

手から伝わった言葉。違う。教練のスローガンみたいな、そんな言葉が聞きたいんじや

ない。

「伊奈帆」

はっと目を見開く。見えない視界でも、確かにそこで見ているのがわかる。

床も重力も消える。別の場所に身体を連れて行かれる。握られた腕の力が強まり。そして離れた。

「それは全て、君たちを。家族を守りたかったからなんだ」
遠のく眼差しが、笑ったように見えた。

↓

7

p.30

「それより、ここから戻る方法を知りませんか」

伊奈帆は首をぐるりと回し、光る石のドームの天井へと視線を送る。長身の男も、それに倣って上を見た。

「戻るだって？ どこへ？」

落ち着いた声だ。発声に知性を感じられる。

「もといいた場所……。家に帰って、夕ご飯作らないと」

「ほう。夕ご飯」

伊奈帆の言葉に、感心した風に頷き顎に手を当てる。長身で、彫りの深い顔立ちだ。理知的な緑の瞳が、柔らかく細められる。

「例えば、どんなものを作るんだい？」

「え？」

こんな非日常極まりない場所で、見知らぬ男と夕食の献立を話すのか。

「ご飯と、あとは唐揚げとか、焼き鮭とか」

「ふむふむ」

とは思うものの、男性は思いの外聞き上手だ。つついっ回答えてしまう。

「栄養バランスを考えて、酢の物とか、サラダとかも」

「得意料理はあるのかい？」

得意料理。一家の家事を担って六年目。家庭料理でおよそ作れないものはない。ハンバーグや青椒肉絲、カルボナーラは食卓に出すと評判がいい。しかし得意で、よく作ることならば。

「だし巻き卵かな……」

お弁当にも、朝食にも、二日と置かず登場する。

「ダシマキタマゴ？ 卵料理？」

伊奈帆は頷く。

「卵と調味料を混ぜて、フライパンでくるくる巻いて焼くんです」

男性が目を瞬かせて首を傾げる。壮年の渋い男性なのに、子どものような所作である。

「くるくる？ 巻く？ どうやって？」

「菜箸でちょい、とやって、こう、手前から向こうに」

伊奈帆はジェスチャー付きで答える。男性はははっ、と無邪気な感じに声を出して笑った。

「難しいなあ。私にはちよつと出来なさそうだ」

その口ぶりから、伊奈帆は彼がかつての自分と似た境遇にあることを察した。やったことのない事を、誰かのためにするということ。不器用で失敗だらけの日々を繋いで、なんとか暮らしていくことを。

「誰か、料理を作ってあげる人がいるんですね」

彼は目を丸く見開いた後、困ったように微笑んだ。

「息子だよ。寂しい思いをさせている」

二人きりの家族なのだろう。

「せめて、美味しいものを食べさせてあげたい」

その気持ちは、わかる気がした。

「簡単なものでいいんじゃないですか」

「例えば？」

材料が少なく応用が効き、簡単に作れるレシピなら。

「スクランブルエッグとか」

何といっても、かき混ぜるだけ。焦がさなければ食べられるだろう。

「それなら、なんとかできそうだ」

歯を見せて笑う男性を見て、伊奈帆は父親が生きていればこのくらいの年齢だったのかな、と想像した。ノイズが奔る。視界がざらつく。そして僕は――

「お父さん」と呼ぶ

↓

8

p.36

「貴方の名前は」と聞く ↓ 9

p.38

そこにいたのは、中世風の、高価そうな服を着た年若い男性。すらりとした美形で、佇まいが一般人とは全く違う。あまり読んだことはないが、絵本に出てくる王子様がそのまま抜け出てきたような青年だ。

彼は厳しい視線を伊奈帆に向けた。

「地球人だな？ どうやって入った？」

諜報員か？ と彼は腰の剣に手を掛ける。鞘に収めた両刃の長剣なんてものは、訓練でだって見たことはない。

「スパイではありません」

ハンズアップで伊奈帆は彼に應對する。どうやって、この状況を切り抜けようかと考えた末。

「迷子です」

と正直に話した所、青年は剣を鞘から抜いた。想像以上に気が短い。まずい状況だ。

「名乗れ」

刃の先端が顎の下で黄色の光を反射する。圧倒的な光を浴びて立つ青年の瞳は、暗い怒りに燃えていた。

昔から人付き合いは苦手だし、やっかみ者になりがちな自分だけけど、こんな目を受けたことは一度もない。剥き出しの憎悪。正直かなり堪えるが、伊奈帆はできる限り平静を装い口を開く。

「界塚伊奈帆」

青年の顔に驚きが広がる。そして、伊奈帆の顔をそれまでとは違う見方で確認する。

「……あの男にも、息子がいたのか」

彼の口からぼつりと溢れた一言が脳内にエコーする。

「それって……」

カン、と剣先が床を叩く。張り詰めた空気は殺気だ。

「口を閉じろ。話すことは何もない」

青年は冷たい視線で見下ろしている。こめかみに汗が伝うが、伊奈帆は唾を飲み込み、口を開く。

「分かった。じゃあ、一つだけ」

「その耳は飾りか。地球人」

ヒュン、と剣が翻り、左側の髪が数本床に落ちる。

「聞こえているけど、一つだけ許してほしい」

耳の上の皮膚が薄く切れて、ヒリヒリと痛い。怖くないわけではないが、これだけは聞いておきたい。

おそらく、父を知る人の。僕のことを地球人と呼ぶ、時代錯誤の服と言葉のこの青年の。

「貴方の名前は？ 僕は名乗った」

青年は王者の顔で微笑んだ。

「ヴァース帝国皇帝ギルゼリア・ヴァース・ヴォルドム」

ヒュ、と風切り音。剣が空間を切り裂いた。伊奈帆の身体が宙に舞う。切っ先の掠めた箇所には血はなく、代わりにあるのは青い光を放つ砂。

「お前たちは、持たざる者の絶望を知らない」

26

↓

11

p.44

「どこから来たの？」

肌の白い、とても綺麗な女の人だ。これまで接したことのない、洗練された淑女の発声と所作に内心ドギマギしつつ、伊奈帆は天井を指さした。

「……上から」

「上？」

彼女は伊奈帆の指の先を追って天井を見た。

「全然違うところから。なんなんですか？ここ」

無防備に晒される白い喉が見ていられずに、伊奈帆はそう言って首を振る。女性はクスリと小さく笑った。

「アルドノア炉よ。そんなことも知らないの？」

「アルドノアって……」

なんのことだろう。学校では、そんな言葉を聞いたことがない。ネットでも、本でも。

ここは常識の通じない場所であるものの、嘘偽りででっち上げたものではないと伊奈帆は思う。それならば、アルドノア烜。ここは烜なのだ。今は何ともないけれど、ここにいてはまずいんじゃないのか。

「ルエル」

「え？」

伊奈帆が間の抜けた声を返すと、女性は口元に手を当てクスクス笑った。子ども扱いされている。正直複雑だが、彼女から見れば子どもに違いない。大人や子どもという概念は相対的なものなのだ。

「自己紹介よ。私の名前はルエルです。貴方は？」

「伊奈帆です。界塚伊奈帆」

「まあ……」

彼女は、びよん、と跳ねるように床を蹴る。重力が小さいのだ。着地までの間隔が長い。白い肌にピンクの髪で跳ねる姿はうさぎのようだ、と柄にもない連想をした。

「貴方少し、あの人に似ているわ」

間近で顔を覗き込まれ、目のやり場に困りそっぽを向く。ルエルは愉快そうにまた笑っ

た。

「あの人って？」

ぶっきらぼうに伊奈帆が聞くと、ルエルは遠い目をして微笑んだ。その笑い方は今までと全く違い、伊奈帆はそうか、その人はもういないのだな、と悟った。

「恋をした人」

彼女の姿が白い霧の中に霞む。

全てが白く染まる頃。もしも会えたら、お友だちになってあげて、と囁く声が最後に聞こえた。

↓

12

p.50

7 Alone. Alone.

冬の街。玄関の扉の前にしゃがみ込んでいるのは小さい男の子だ。

「どうしたの？」

伊奈帆は膝に手を当てて、少し屈んで聞いてみる。膝の間に頭を押し付けていた子どもは、はっとして顔を上げた。くすんだ色の金髪に、寒い地方特有の白い肌。大きな猫目の碧眼が丸くなって伊奈帆を見た。

「お父さんを待つてゐるんです」

しょげた様子で地面を見る子はそう言った。もしかしたら、声をかけられて伊奈帆のことを父親と勘違いしたのかもしれない。

小さい子の相手は柄ではないが、この子どもとは波長が会う気がした。伊奈帆は彼の隣に腰を下ろす。同じ方向を眺めると、そこには雪を被った赤いポストとペンキの褪せた犬小屋がある。

「お父さんは……。何をしてる人？」

寒さはさほど感じないが、吐く息が白い。

「研究」

子どもは短く切るように言った。

「……お母さんは？」

「いなくなりました」

「そう」

ひとりぼっちで、家族の帰りを待つ子ども。昔の自分もそうだったし、今もそれほど変わらない。二人暮らしの姉が家に帰ってくるまで、時間を潰そうと家事や料理に精を出した時の言いような寂しさを覚えている。

「お兄さん、誰？」

どのくらい経った頃だろう。子どもが控え目な声で聞いた。

「伊奈帆。君は？」

「スレイン」

スレインがはにかんで微笑み、伊奈帆は小さく笑い返す。それだけで、打ち解けた気がした。

「イナホのお父さんって、どんな人？」

スレインが三角座りの自分の膝に手を当てて、そこに頬を乗せて聞く。期待を帯びたまん丸い碧の瞳に申し訳ない心地になるが、伊奈帆は左右に首を振る。

「僕、お父さんいないんだ。お母さんも。物心ついていたことがないから、覚えてないんだ」

スレインがしゅんと下を向いた。

「ごめんなさい」

「どうして謝るのさ」

伊奈帆は彼の背を撫でる。こんなことをするのは初めてだ。

「スレインのお父さんは、どんな人？」

伊奈帆が聞くと、スレインは赤いポストの方に顔を向けてぼそぼそと答える。

「あまり家に帰ってこないんです。お母さんがいなくなってからは、それが前より多くなった」

だから彼は、こうして玄關の外で父の帰りを待っているのだ。寝たふりをして、顔を見せないようにして。

「さみしい？」

「うん」

スレインが、前を見たままにこりと笑った。

「でも、この前一緒にピクニックに出かけたんです」

そして伊奈帆に顔を向ける。気丈な笑顔に伊奈帆も笑顔で応える。

「お弁当持って？」

「はい」

「おかずは何だったの？」

「サンドイッチです」

お父さんが作ってくれたんだけど、とスレインは眉尻を下げて笑う。

「お父さん、頭はいいのに料理は全然できなくて。僕よりずっと下手なんです。パンの厚さはバラバラだし、ジャムが垂れて手が汚れるし」

七、八歳の息子にこう言われるとは。本当に研究一筋なのだろう。

「でも、美味しかった。今まで食べたどんな食べ物より」

その言葉に、伊奈帆は冬の海を思い出す。二人暮らしを始めて間も無くの姉弟二人き

りの遠出。ピクニックと呼ぶには修行みたいに寒かったけど、あの姉姉が作ってくれた硬いおにぎりとしよっぱい卵焼きは、味はともかく美味しかった。

「ねえ、スレイン。卵好き？」

「？ うん」

不思議そうな顔のスレインに、伊奈帆は膝で頬杖をつき微笑みかける。

「だし巻き卵って、知ってる？」

「ダシマキタマゴ？」

「僕の国の家庭料理。お出汁と卵を混ぜて、くるくる巻いて焼いていくんだ」

ハンドジェスチャーで作り方を伝えると、スレインは眉をハの字に下げて笑った。

「難しそう。スクランブルエッグならできるけど」

ちよつとパラパラしてるけど、と呟くスレインに、伊奈帆は笑って頷いた。

「スクランブルエッグは、僕もよく作る」

「そうなんだ」

「半熟で、火を止めるんだよ」

「ふーん」

並んで座る二人の間に、やがて夕日が差し込んだ。白い雪が赤く燃え、世界が逆さを向いたパズルのようにバラバラになる。

↓

10

p.40

「お父さん……」

声に出してしまっていた。

伊奈帆の声に、彼は緑の瞳を三日月のように細め、眩しそうに伊奈帆を見た。

「……そう。君と同じくらいの年だ」

寂しそうな微笑みに、なんだか胸が痛くなる。この人はもう、息子に会うことが出来ないのだ。寂しい思いをさせた償いに、料理を作ってあげたいと願う子どもに二度と会えない。僕との会話も、下手な卵料理に笑い合う光景も、思い描いて終わるだけ。

ここは、そういう場所なのか。

「その子の名前は？」

伊奈帆は聞いた。せめて、覚えておいて、いつか会えたら彼の話ができるように。すると彼は、ゆっくり左右に首を振り、伊奈帆に向かって笑いかけた。

「君の名前は？」

↓
3
p.14

その笑い顔は、明るくて、カラッとしていて、ほんの少しの憧憬を宿していた。きっと、父親という存在にしかできない笑い方なのだろうと伊奈帆は感じた。

風が花弁を運んでくる。その一欠けを手に乗せると、それは音もなく溶けた。風花だ。気づくと視界は白く染まり、彼の姿が瞳を残し見えなくなる。

伊奈帆が伸ばす手は、雪の壁に弾かれた。

「僕は……」

「残念だが、帰る方法は知らない」

彼はゆるゆると首を振る。そして、悪戯を失敗した子どものような顔で笑った。

「私は帰ることができないんだ。戻る世界に、私のボディは無いからね」

「ボディ？」

今の状況に不釣り合いな無機質な単語だ。彼の言わんとするところは理解できるが、そうだとするとこれは臨死体験というものになるのだろうか。

ははっ、と明るい笑い声。男が歯を見せて笑った。

「考えることだ。忘れてしまっても。考えたことが雪道の轍のように春には消えてしま
うとしても」

大きな手が、肩を抱く。

「記憶になくとも、心はそれを覚えているんだ」

その手から、きらきらとした風が起る。霜の風だ。それは周囲を旋回し、円形に揺

蕩いその中心にやがて虚空を覗かせた。

ぼん、と掴んだ肩を軽く押された。足裏はあっけなく地面を離れ、伊奈帆は風の中にいた。

「待って！ 貴方の名前は？」

切れ長の緑の瞳を柔らかに、彼はひらひら手を振った。

「よろしく頼むよ。少年」

何を、と聞く前に線のように周囲が閉じる。浮遊感。巻き起こる風が身体を――

上へ運ぶ ↓

10

p.40

下へ運ぶ ↓

13

p.54

10 Orphan

暗く狭い場所にいたのは、黒い服を着た、同じ年くらいの少年だ。

「……貴方、誰です？」

ちらりとこちらを見る目の瞼が腫れぼったい。赤くなった眦を、少年の人差し指が拭いた。

伊奈帆は逡巡ののち、コンテナの影に隠れるようにして座り込む少年の傍に腰を下ろす。前に顔を向けたまま、人一人分空いた右隣に声をかける。

「界塚伊奈帆。君は？」

数秒の沈黙。ちらりと横目を送ると、充血した赤い目と視線が合った。彼は弱々しい笑みを浮かべる。

「スレイン・トロイヤードです」

話のできたことにほっとして、伊奈帆は彼に顔を向ける。

「……泣いてるの？」

スレインは小さく頷いた。

「……お父さんが、死んだんです」

黒い服は喪服なのだ。座り込んで項垂れる彼が、自分よりもずっと小さい、幼児のよう
うに感じられた。

「……寂しい？」

「はい。すごく」

と彼は床をじっと見る。

しばらく、二人で床の切り替え線を見つめていた。

「友だちはいないの？」

随分経ってから、伊奈帆が聞いた。口に出した途端、こんなことを口にできるように
なったのだ、と自分の変化に驚く。

スレインは静かに首を振る。

「……僕は地球人ですから」

地球人って、と出そうになる声を止める。彼の口ぶりから、おそらくここは地球では
なく、火星かその領土なのだと理解する。伊奈帆は地球で、ヴァースがどのように言わ

れているかを知っている。ならば、逆も然りだろう。

スレインがぱっと顔を上げた。少し痛々しいカラ元氣の笑顔が伊奈帆に向く。

「でも、よくして下さる方がいます。綺麗で、優しくて、僕のことを差別しない」

彼は胸元で、シャツの布地を指に絡めて手を握る。何かを確かめるように。

「あの方がいなければ、僕は今生きていない。命の恩人です」

「……そうなんだ」

積荷の山の中にひっそりと二人座り込む。倉庫だろうか。工場だろうか。とても静かな場所なのだ。

やがてスレインがふう、と息を吐き出した。

「僕は家族を失ったけど、ひとりぼっちじゃない。これからは、あの方のために生きていこうと思うんです」

彼の笑顔に伊奈帆は微笑む。

「それも、いいかもしれないね」

大切な人のために役に立とうとすることは、自然なことだと思われた。

「伊奈帆は、家族は？」

「姉貴が一人。親はいない」

「そうですか」

一人分空いた距離が、いつの間にか消えていた。触れるくらいに肩を並べ、同じ方を見て話す。スレインといると、いつもの自分じゃないみたいのに、そのままの言葉を語れることにとっても落ち着く。不思議な感じがした。

この時が続けばいい。でも僕はきつとまた、別の場所に攫われるように行くのだろう。伊奈帆は立ち上がり、座るスレインに向き直る。

二人の瞳が交錯する。

「……もし、君が嫌じゃなければ」

伊奈帆は右手を差し出した。

「僕と、友だちになってよ」

伊奈帆は、伸ばした手でスレインの――

左手を握る ↓

14 p.59

右手を握る ↓

15 p.64

11 Hati

ガラスの向こうに宇宙が見える。

伊奈帆は、ガラス壁の素材と厚みはどのくらいだろうか、つと考え、その前に立つ後ろ姿に目を奪われた。星を散らした漆黒の額縁の中で磨き上げられたスチールフロアに映り込む、浮かび上がる金の髪と真紅の軍服。細身の体軀のその背中は、伸びた背筋と漂う気迫に見た目よりも大きく見える。

「用がないなら消えろ」

後ろ頭を向けたまま、青年が言った。思ったよりも柔らかく、静かな発声だ。話してみたい、と伊奈帆は思った。

「貴方は、皇帝陛下ですか？」

「はっ」

乾いた笑いは冷めていた。

「僕が皇族？ 世間知らずに程がある」

知らないのなら教えてやろう、と彼は振り向く。燕尾の裾がスローモーションで翻る。

「スレイン・ザーツバルム・トロイヤード伯爵だ」

プラチナブロンドの巻き毛と涼やかな碧眼。伊奈帆とそう変わらないほど年若い、美しい青年だ。

「伯爵……。えらい人ですね」

その顔が皮肉を滲ます笑みを浮かべた。スレインは伊奈帆の全身を検め、口を開く。

「お前、地球人か？」

「はい」

伊奈帆が着ているのは、学校の制服だ。家にある中で一番高価な服とはいえ、伯爵服の青年と対峙するにはあまりに場違いだと思に至る。

しかし伯爵はそのことには関心が無いようだ。彼は地球人、と口の中で呟いて、再び星の海へ向き直る。

伊奈帆は少し躊躇ったものの、結局彼の隣に移動した。

「ここは、どこなんですか？」

「月だ」

即答。

「月？」

伊奈帆が問い返す。スレインの横顔を見る。その瞳には、彼方の星が映り込んでいた。なんて綺麗なんだろう。

「お前、月は好きか？」

急に聞かれて、肩がぴくりと上下する。

「考えたことないけど……」

衛星の直径、重力、自転周期に表面温度。クレーターの名称に月齢その他。月について、基本的なデータはおおよそ誦んじることができる。興味深いからだ。しかし好きかどうかは思考の外だ。

面白いということが、好きの答えでいいのだろうか。

数秒間考えて、伊奈帆は言葉としてこう答える。

「月の神話は面白い」

スレインは伊奈帆に横目を送った。

「例えば？」

伊奈帆の脳裏に、北欧神話がまず浮かぶ。兵科教練の練習機の名がスレイプニール。北欧神話は馴染み深い。神々の最終戦争ラグナロクにて、世界の形は大きく変わる。光が消える。光とは太陽。そして。

「月を食べる狼の話」

その名はハティ。

「ふっ、……ははははは！」

スレインが喉を仰け反らせて笑った。声の空虚さが少し怖い。

「なるほど。月を食べてしまうのか」

スレインはガラスに手を当て、ほんの少し首を前に傾ける。伶俐な横顔は、穏やかに微笑んでいる。

「この月が歪なのは、きっとその狼のせいだろう」

月が、どうしたというのだろう。伊奈帆にとっては、月にいるという実感もない。スレインが伊奈帆に顔を向けた。

「なあ、お前」

「僕は伊奈帆。お前じゃない」

生意気だな、と小さく笑う声をする。

「伊奈帆。狼はどうして月を食べたと思う？」

月を追いかけ、追いつき、飲み込んだ巨大な狼ハティ。なぜハティは、月をそもそも追いかけたのか。

「月が好きだったからじゃないの」

思ったことをそのまま言った。好きだから追いかけて、追いかけて。そして追いつき、捕まえた。勝手な想像だが、食べるために追いかけたのではなく、追いついてしまったが最後、食べるしか道は無かったのではないか。

スレインは満足そうに頷いた。

「僕もそう思う。美しいものを、眺めているだけでは駄目なんだ。そのままにはおけない」

彼はガラスに接した拳を強く握りしめた。ピリ、ピリ、とガラスではなく内側にジグザグな閃光が奔り、空間が亀裂を生じる。

「守りたいのに、手からこぼれて壊れてしまう。いっそ、力など求めず、戦わなければ良かったのか」

光の割れ目がそこら中に現れる。異空間へのワープ。その前に、伊奈帆は彼に顔を向け言う。

「それでも、戦うしかない」

↓

14

p.59

「そうかもしれない」

↓

18

p.71

12
Lamenting Knight

仄暗く、狭い場所だ。無機質な金属製の壁に、沢山の配管が縦横に蛇のようにへばりついている。

「……誰です？」

部屋の中央に位置する円柱形の水槽の前。細身の後ろ姿があつた。声は彼から。低く掠れた、形容するなら甘いと言つていい声だった。

「界塚伊奈帆。貴方は？」

数歩の後ろから問いかける。

「スレイン・トロイヤード」

彼は名前を呟き、踏む足の位置を変え振り向く。踵が小さく床を打ち、上衣の裾が控え目に翻る。洗練された優美な所作。発光するタンクの逆光で、髪も肌も青い光に染まっていた。青年というには線の細い、シャープに整った顔立ちの少年だった。

スレインが伊奈帆の上から下へと視線を動かす。

「その服は？」

その服、と彼が怪訝に見るのは伊奈帆の着ている芦原高校の制服だ。

「学校の制服だけど」

「学校？」

スレインが顎を引く。伊奈帆は右手の先を彼に向ける。

「僕からすれば、君の服の方がどうかしてる」

舞台衣装のように凝った作りの灰色の服。ファンタジーの騎士のような。それが不思議と、彼には浮かずによく似合う。

スレインは僅かに微笑む。

「僕もそう思います。でも、これが普通……。ちや、普通以上のことなんだ」

「その服を着て、何をするの？」

スレインは完璧な速度と動きで心臓の位置に右手を当てる。伏せ目に前髪がかかる。

「人を殺すんです」

顔が上がる。初めて見た彼の笑顔は、自嘲を含み荒んでいた。

「僕は騎士ですから」

「騎士……」

ゲームや本の世界でしか聞かないような言葉も受け入れられるのは、彼の纏う空気があまりに悲壮にすぎるからだ。

「たくさんの屍を越え、名前も知らない命をいくつも踏みしめてきた」

スレインはタンクに再び向き直り、歩み寄る。その曲面に手のひらを当てた。

「失わないために」

水槽の上部を見つめ、青く照り返す唇を震わせるその様は、まるで亡霊のように見える。

「僕が失わないために、他の全てを奪うんだ」

彼が一心に見つめる先の水槽。伊奈帆には、その中に何も見えない。誰かが、この中にいたのかもしれない。彼の失いたくないもの。他の人の、全てを奪ってまで守ろうとしたもの。

守って、そして失った。残ったのは罪と罰。

亡国の騎士。彼の後ろ姿を見ると、そういう言葉が浮かぶ。

「殺した。奪った。そしてそれを、僕はこれからも続ける。貴女がお目覚めになるまで」

湿り気のある柔らかいものが首筋に伝った。伊奈帆はぎょつとして首の後ろに手を当てる。指が摘んだのは赤い花びら。パラパラパラ、と雨のように舞い落ちるそれが視界を真紅に染めていく。スレインの後ろ姿が見えなくなる。独白めいた彼の言葉がこびりついて離れない。

守るために奪う。それは――

「僕も同じだ」↓ 16 p.65

「戦争だから」↓ 21 p.83

13 Trojan Horse

臭いがまず認識され、伊奈帆は眉を顰める。生臭さのある湿った臭いは汗とは別の体臭。窓のない、コンテナが積み上がった見通しの悪い暗い場所。不快感が募る。

「……誰？」

か細い声が、すぐその角の先から聞こえた。喉が枯れたような、掠れて途切れる声に胸騒ぎがして咄嗟に足がそちらへ向いた。

「……！……ごめん」

そして見えた光景に、伊奈帆は予想していたとはいえ足を止め、見たそのことを謝罪した。角の先に、左頬を下にして倒れ込んでいるのは少年。衣服の乱れと床の汚れ。よく見れば、はだけた首元と手首に赤い痣がある。状況からして、何があったかは明らかだ。伊奈帆は当事者になったことはないが、こういうことは施設で度々起こっていた。

「……貴方、なんなんですか？」

少年は気怠そうに身体を起こし、額に手を当て、息を吐く。晒した首筋が痛々しく、

伊奈帆は彼から視線を外した。上着を貸したり、手当てをしたり、手助けをすべきかもしれない。しかしそれが彼を傷つけることになる可能性がわからないほど無神経なわけでもない。

「ここはどこ？」

結局、少し離れた位置に突っ立ったまま、伊奈帆は彼にそう聞いた。

「クルーテオ伯爵の揚陸城です」

「は？」

聞き慣れない言葉の羅列に、伊奈帆は口を開ける。少年は床に手をつき座り込んだ状態で、伊奈帆の全身をざっと眺めた。

「地球の人ですか？」

初めてされる質問だ。そして言外の意味を察し、こう聞いた。

「そうだけど。君は？」

「僕も地球人です」

「地球人？」

さっきの口ぶりから、彼は火星、ヴァースの人間かと思った。

「……っ！ごほ、ごほごほ、かは、……っ！」

咳き込む少年に、伊奈帆は反射的に駆け寄って膝をつく。さする背の紺色の上着はじつとり湿って、冷たい汗と熱い背中に胸がざわつく。

「ひどいな……。初めてじゃない？」

咳が治る頃に伊奈帆が聞くと、彼はこくりと頷いた。生理的な涙が眦を濡らしている。近くで見る横顔は、同じくらいの年に見えた。

「誰か、相談できる人は？」

「……はは」

「何かおかしい？」

少年は横目で伊奈帆を見る。暗い瞳だ。

「だって、みんな火星人なんですよ」

がん、と頭を殴られたような衝撃だった。地球の民間人がヴァースに抱く感情は嫌悪と憎悪。それは火星の民にとっても同じ。いや、もしかしたらそれ以上かもしれない。

「火星人って……。ヴァースの人？ だからって、こんなこと」

伊奈帆は世間知らずな詭弁に聞こえることを承知で言葉を紡ぐが、少年の声がそれを

遮った。

「僕が地球人だから、仕方がないんです」

自嘲するような微笑みを浮かべ、彼は小さく肩を竦めた。

「貴方も地球人なら、ここにいて同じ目に合いますよ。逃げた方がいい」

伊奈帆ははつきりと首を振る。

「君を置いてはいけないよ」

少年の眉間に深い皺が寄る。

「会ったばかりで、何なんですか？僕の名前だって知らないのに」

言われて初めて思い至り、伊奈帆は彼に問いかける。

「名前、なんていうの？」

「スレイン……」

「僕は伊奈帆」

手を差し伸べる。その瞬間、周囲に青い光がチラついた。濃淡を目まぐるしく蠢き広がるのは炎。青い炎は熱くはない。視界を侵食する火炎の中で、スレインに伊奈帆は手を伸ばす。

「名前は知った。理由が他にも必要？」

見開く瞳の色は碧。炎の中の氷のように揺らめいた。

「一緒に行こう、僕の手を取って！」

スレインの手が伊奈帆の――

左手を握った ↓

19

p.74

右手を握った ↓

20

p.77

14 A Call

伊奈帆は手を額に翳した。それは周囲があまりに白く、眩しさを錯覚したからだ。自身の手を見る。ちゃんとある。胸も、脚も。しかし、何かがおかしい。やがて、上下の境目さえない場所の違和感に気づく。影がないのだ。単一色の、のっぺりとした自分の手のひらを表裏して指を動かす。

「君は、僕だね」

何処からか声がした。気がつくと、正面の少し先に右向きに立つ男がいた。日系の、自分より何歳か歳上の青年だ。彼の着ている紺色の衣服は、学校の教官が身につけているものと同じ。地球連合軍の制服。

「貴方は？」

伊奈帆が聞くと、彼はこちらに顔を向けた。驚く。左目の位置に眼帯があるが、目鼻立ちは自分に瓜二つだ。

「界塚伊奈帆」

その顔で、彼は僕の名前を口にする。ふざけているのか。

「僕をからかっている？」

「事実を述べているだけ」

伊奈帆と似た顔の軍人は、無表情で淡々と告げる。

「ここ、説明してくれる？」

「全知全能ならば、あるいはね」

「どういうこと？」

「君が納得のいく説明なんて、僕にできるわけではない」

回りくどいし抽象的だ。会話の相性が良くない。

彼は少し顎を上げ、隻眼をスツと細めた。

「でも、ここにあるのがわかるんだ。粉々になった欠片が」

胸の前で、彼の右手が握られる。

「僕は、探しているんだ。もうずっと」

表情の変化は少ないが、瞳の色に悲壮感が滲んでいる。

「誰を？」

彼は伊奈帆をじっと見つめた。

「無意味な問いだ。君は、その名を知っているはず」

その時、自分の意思とは無関係にある名前が唇に乗る。

「スレイン？」

彼は頷き、上を向けた手を差し出す。

「君が拾ってきた、最後のピースを僕にukれない？」

最後のピース？ 拾ってきた？

「何のこと？」

「あるだろう？ そのポケットに」

伊奈帆は学生服の胸ポケットの上に手を当てた。入れた覚えのついぞない、何か硬いものがある。指を差し込み、チャリ、と金属音がした。紐状のそれに指をかけて引き抜く。現れたのは銀のペンダント。美しい細工が施され、碧の石が埋め込んである。

隻眼の男にそれを渡す。彼は大事そうにそれを受け取り、手の中に視線を落とす。

「これは？」

「彼の部分」

その時、白い空間に地平線が現れた。両手大の球体が宙に浮かんでおり、地面に薄い影が映っている。

「バラバラになった欠片が、全て揃った」

愛おしげにその表面を指が撫で、首飾りは球体へと吸い込まれる。青白い光が辺りを包み、閉じた臉を開くと、上下逆さまの青い空。地平で分かつ鏡面世界が先にあった。

パシャ、と水音。床……、地面に薄く水が張っている。

「どちらの世界に君は行く？」

男が聞いた。上か下か、という選択肢。伊奈帆にとってどんなに不思議な現象も、厳然たる摂理なのだろう。

「貴方が先に決めればいい」

だから、彼に先を譲る。おそらく、彼は僕が来るのを、僕が“スレイン”の欠片を持ってくるのを、待っていたに違いない。時間という概念が先へと進むものだと定義すれば、気が遠くなるような時を白い世界で待っていた。

「それもそうだ」

言葉にせずとも伝わったのか、青年はこくりと頷いた。

「でも、同時でなければいけない。異物を飲み込んだら、裂け目が消えてしまうから」
 招かれざる客、という言葉が浮かんだ。しかし、この先にあるもの、この先にいる人
 を考えれば、行かずにいられない。伊奈帆にとって、そういう、意思を越えた何かに従
 うのは初めてのことだ。陳腐な言葉なら、運命とでも呼べるもの。

それだけの衝動を生じさせるのは。

「スレインに会えたら、どうするの？」

伊奈帆は問う。眼帯の青年は少し考えた後、すっと足を前に踏み出す。ぽつりと彼が
 呟いた言葉は――

伊奈帆には聞こえなかった。 ↓ 15 p.64

「元いた世界に彼と戻るよ」 ↓ 16 p.65

「どこか遠くへ行くつもりだ」 ↓ 17 p.68

「君には、関わりないことだ」 ↓ 21 p.83

彼は僕で、僕は彼なのだ。おそらく、色々なものを越えたところに僕はいて、彼が僕を導いた。いくつかの場所を通り越した僕の他に、違う僕もいたかもしれない。僕らが持ち寄ったスレインの、バラバラになった在処のパーツ。記憶や、願いや、後悔を宿す魂の形。そういうものが一つになったこの先で、きつと僕はスレインに出会うだろう。

そうしたら、僕は。彼に何を言えるだろう。言えやしない。僕は何も知らないんだ。時間も場所も一方通行ではない次元の中に、僕は幾つも存在している。それはスレインと同じじゃないか。

蜘蛛の巣のように分岐する。僕は、スレインと。

「同級生なら、楽しいだろう」↓ 18 p.71

「同じところで、隣にいたい」↓ 20 p.77

16 The Penultimate Truth

コツン、と黒のナイトがボードを打つ音が響く。

「チェックメイト」

つまらなそうな声音で告げられた自身の詰み。盤上を見渡し、伊奈帆は言う。

「僕の負けだ」

終戦から三年目の夏。極秘施設の面会室で、伊奈帆はスレインとチェスをしていた。慣れ親しんだと言っているほど、繰り返され、型に嵌ったシチュエーション。

スレインは、わざわざナイトを進め、その指がキングを持ち上げ奪取した。

「勝ったのに、どうして怒るの？」

無然とした表情はいつもの事だが、どちらが勝ってもここまでしない。チツ、と舌打ちが聞こえた。碧の双眸が、剣呑な色を宿して伊奈帆を睨む。

「お前が、簡単に負けるからだ」

なるほど。戦績は伊奈帆が優勢だが、力量に勝敗ほどの差はない。今日は、伊奈帆が

上の空で集中出来ていなかった。手応えがなく不満なのだろう。舐められている、と感じたのかもしれない。

「ごめん、手を抜いたわけじゃないんだ」

謝罪する。スレインは眉を顰め、口を小さく薄く開く。

「何かあったのか」

潜めた声に伊奈帆は黙って首を振る。

「これからあるんだ」

唾を飲む音が聞こえた。それだけで全てを察した彼はボードに目を落とす。彼の視線の先には、王を討ち取られた盤上に立つ白のクイーンがあつた。

——戦いが始まる。再び。

「僕は戦う」

伊奈帆の言葉に、スレインは顔を上げた。二人の視線が交錯し、やがてふっと逸らされる。

「そうか」

俯き、じっと考え込む彼に向かって、伊奈帆は身を乗り出す。

「それで、これが本題なんだ」

テーブルの上で指を組む。自身の両手を強く握る。爪が甲に食い込んだ。見据える先の男は、いまだ手負いの獣か。いや。違う。

「僕は君を死なせたくない。スレイン。君を守りたい」

乾いた翼の白い鳥。

かつて、星の海を誰よりも速く駆け抜けた。

「でも、それ以上に」

八本脚の神獣ならば、その隣を飛べるはず。

「君と一緒に、戦いたいと思うんだ」

ED 4 「オーデインとフェンリル」

17 Wind, Snow and Stars

大きく揺れる軍用車のサイドウィンドウに、スレインは頬を寄せた。見渡す限りに草木はなく、ゴツゴツとした岩肌の大地が広がっている。

「どこまで行くつもりだ？」

運転席の男に問う。伊奈帆は進行方向に顔を向けたまま、しばらく経ってこう言った。

「僕たち以外、誰もいないところまで」

なんだ、とスレインはシートに身体を沈ませる。脱獄からこの七日、あれこれと気を揉んだのが馬鹿みたいだ。

「それなら、逃げる必要なかったろう」

極秘施設の面会室。あの場所は、例えるならば世界の底だ。平和な世界に取り残された軍神と囚人。あれほど閉ざされた、孤独な場所も他にない。二人きりと言うならば、あそこを置いてどこがあるのか。スレインには、こんな向こう見ずな逃避行をする必要は無いと思えた。自分とはもなく、伊奈帆には、平和な世界に居場所があるのだ。

伊奈帆はくすりと笑いを漏らした。こんなに機嫌が良い彼を見るのは初めてのことだ。
「駄目だよ。空が見えないんだから」

窓の外には、荒涼たる大地。そして地平線。箒ではいたような雲の浮かぶ、青からオレンジ色へ移りゆく空の色。

スレインの頬に笑みが浮かぶ。ウィンドウを下げ、肘を乗せて顔を出す。凍てつく風が頬を殴った。

「伊奈帆」

「何？」

地球の空気の温度と匂い。砂埃でざらつく下と、黄昏時の空の色。先へ進むと、きつと雪も見られるだろう。

それは、胸が躍る光景だ。

「……以前、僕はお前には情緒がないと言ったけれど」

伊奈帆が顔を斜めに向けた。左眼窩に収まる義眼が不自然に収縮する。

「撤回する。案外ロマンティストだな。お前」

地平の先の夕日が沈む。長い黄昏の時が来る。

ED
5
「世界の果てへ」

18 Out of the Past

巨大な蝙蝠傘が曇天に飛んだ。

「あっ！」

「うわっ!？」

バッシャン!と水たまりに尻餅をつく。宙から落ちた傘が石突きを中心とし、くるくるとコマのように回転してやがて止まった。

「っい、ててて……」

「……う」

出会い頭にぶつかって双方転んだ。レインコートの裾が長くて良かった、と思いつつ伊奈帆は顔を上げる。

「あっ、大丈夫ですか!? お怪我は!？」

とポリウム大きめで至近距離に覗き込む顔があり、背中が五センチメートルほど後退。髪と肌の色素の淡い、目鼻立ちの整った北欧系の少年だ。見ると相手は同じ学校の

制服。ネクタイの色から、学年も同じだとわかる。

しかし、学校で見かけた覚えはない。こんな目立つ容姿なら、一度見たら記憶に残ると――。

――砕けた月。涙の雫。白い雪。

――……レイン

何かが脳裏で瞬いた。

なんだ、これ。

血液がドクドクと身体中を駆け巡る。頬を流れる雨の雫に混じって、瞼の両側から熱いものが伝う。

なんだ、これ。泣いてる？ どうして？

わからない。

伊奈帆は急いで立ち上がる。そして彼に背を向けた。

「別に」

「あ……」

言い捨て、顔を見ないよう走り去る。バシヤバシヤと、ローファーを水に浸しながら、伊奈帆は早鐘を打つ心臓を押さえた。

ED
2
「転校生」

19 Beyond the Horizon

「貴方は僕の敵ですか!？」

操縦桿を握る伊奈帆の手が固まった。リスクを想定し、この火星人を海に沈めてしまわなければ。

「……違う」

理性はそう叫ぶのに。

衝動的に、切り離すはずのワイヤーを巻き寄せる。蝙蝠に似た火星の戦闘機は着水した。

合流したデューカリオンでスカイキャリアを引き揚げ、ボートに乗り込み救助に向かう。回線を開き信号を送り、数度の応酬の後ハッチが開いた。ぐったりとした様子でコックピットに項垂れているのはヴァース一般兵の軍服を着た少年。

「コウモリ？」

呼びかけると、ゆっくりと顔が上がる。

「オレンジ色、ですか」

吊り上がった猫目が伊奈帆をぎろりと睨む。

「海に落としたと思えば助けに来て。貴方、僕の敵なんですか？ 味方なんですか？」

伊奈帆はどう答えたものか逡巡する。理屈ではないのだ。理屈以外を説明するのは初めてのことだった。

どうして、僕はコウモリを助けたのだろうか。

敵ではないなら、味方だろうか。

いや、彼が敵でも味方でも、僕は――。

そして、ある言葉が浮かぶ。

「僕は君の友だちだよ」

コウモリが目を見開いた。

「友だち？」

伊奈帆は頷く。

「うん。そうなれたらいいなって思うんだけど。……どうかな」

彼は何も言わずに、不思議そうに伊奈帆を見つめた。伊奈帆は右手を差し伸べる。

「君、名前は？」

伊奈帆の顔と伸ばされた手を交互に見て、彼はそして口を開く。

「スレイン・トロイヤードです」

スレインの手が伊奈帆の手を取る。

「僕は伊奈帆。界塚伊奈帆」

握り返す手を引き、機体の外に出る。海上の夜空は振るほどの星が瞬いている。そこ

へ燃え尽きた宇宙の塵。流星が一筋。

「これから、よろしく。スレイン」

星明かりを照り返す頬がくしゃりと綻ぶ。

「はい、伊奈帆」

ED 6 「オレンジとコウモリ」

↓ 追加
ED 8
p.90

20 The Boys of Earth

余計なボタンの多い服だな、という感想を抱きつつ、伊奈帆は襟元のボタンを止めた。

中世風の制服は、見た目はいいが着方がどうもややこしい。もつと言えば、過剰な装飾の調度品が機能美を重視する部屋的设计にそぐわないし、棚にずらりと並ぶ酒瓶の中身は全て、小指の爪の先ほどこに残っていない。矜持という名の見栄は見苦しいな、と思いつつ、襟を正して机の上の白手袋を手を取った。その時シュツ、と音がして、部屋の扉が外から開く。

「伊奈帆？」

「おはようスレイン」

ひょっこりと顔を覗かせた相手に、伊奈帆は手袋を嵌めながら答えた。そして扉に歩み寄る。

「どうかな」

「似合っていますよ」

同じ服を着たスレインがにこにこ答える。彼の方は、容姿の補正効果もあり騎士めいて非常に様になっている。スレインと並ぶと、自分の姿は仮装めいて見えないだろうかと少し心配になった。

「よくこんな、面倒くさい服を着るよね」

まあいいか、と割り切って軽口を叩く。スレインは同感です、と頷いた。

「ここでは、これが普通なんですよ」

「なるほどね」

通路に出ると、すぐに壁。無機質な金属壁と天井に等間隔に埋め込まれた白色ライト。テクノロジーを結集した揚陸城だ。

一九九九年。ヘヴンズ・フォールのその時、僕は宇宙にいた。サテライトに点在する宇宙軍基地の民間人住居。軍人の家族が居住するスペースだ。父親と、母親。そして姉のユキ。四人で暮らしていたらしい。何かの作戦で父が死に、時を置かずに母が死んだ。僕とユキ姉は軍の施設に住居を移し、僕らと同じように家族を失った子どもたちと暮

らしていた。その時、僕はまだ一歳にもなっていなかったけど、ユキ姉がアナログのアルバムを持っていた。だから、両親の顔もうっすらと覚えている。施設での生活はあまり治安が良くなって、いじめへの過剰な正当防衛で八歳の時に僕らはそこを追い出された。もっと大きい子たちが住む集合住宅へ引っ越し、何年かしてユキ姉は地球連合軍宇宙軍の軍人になった。僕も数年後にはそうなるだろうと考えていた。

半年前。その基地衛星が爆破した。

原因はわかっていない。最後に覚えているのは、避難所で伏せた身体の下にいた幼い姉弟の固く強張った背中だ。

「姫様にお会いするのは一年ぶりです」

通路を並んで進んでいると、スレインが僕にそう話しかけた。今日から僕らは、地球に着くまでその人の世話係を務めることになっている。

「その、お姫様ってどんな人？」

スレインが人差し指を立てて、僕に向かって口を開く。

「アセイラム・ヴァース・アリュースシア姫殿下です。ヴァース帝国の第一皇女ですよ」
「そうじゃなくて、君から見てどんな人なのか、ってこと」

これまで、何度か話には聞いている。優しい、とか、綺麗だ、とか。幼馴染だということも。スレインが火星に降り立った経緯も、ダイジェストでは聞いているが、彼女との出会いについては聞いていない。

スレインは少し目を泳がせて、眉を下げ、伏目に微笑む。

「僕が生きているのは、姫様のおかげです」

続くかと思われた言葉は何も出てこず黙り込んだスレインに、伊奈帆はふう、と息を吐く。

「命の恩人ってわけだね」

口には出さないが、僕にとってのスレインみたいなものかな、と想像する。

基地爆破の後。避難用のスペーススーツのまま、僕は真空の宇宙空間に投げ出された。最後に見たのは、どこまでも続く真空の宇宙空間。先頭状態になったら。デブリが一つ

でも掠めたら。酸素が尽きたら。そういうことを考えて、宇宙で死ぬとはどういうことかはつきりと分かった。

父も、こうして死んだのだろうか。光年彼方の星の光を恐ろしく感じながら、僕は意識を失った。

目が覚めると、見たことのない設備の整った医務室にいた。

「気がつきましたか？」

傍で、スレインが心配そうに見下ろしていた。

僕を救助したのはヴァースの騎士の一人だった。火星騎士三十七家門が一人クルーテオ伯爵。スレインは彼の下僕として仕えている地球人だった。僕を見つけてくれたのはスレインで、伯爵に救助を掛け合ってくれたらしい。初めて会った医務室で、彼の頬に痣があった理由を知り、僕は申し訳なくなるとともに、スレインに感謝してもしきれない、という思いを抱いた。それしか道がないとはいえ、火星騎士につくというのは、地球軍と戦うということだ。ユキ姉や高校の友だち。そういうみんなが敵になるといふことだけれど、迷いは無かった。

大扉の前で立ち止まる。この先に、火星からやってきたアセイラム姫がいる。

「伊奈帆。失礼のないように」

スレインが小声で嗜める。伊奈帆は彼の肘を肘でつつく。

「君のほうこそ」

僕は、命を助けられた。他の火星人はともかく、スレインと、彼の大切な人のためにいざとなったら戦おう。彼が敬愛する姫様も、僕は同じように守ろう。

そして、扉が開く。

ED 3 「地球の少年たち」

↓ 追加
ED 7
p.85

21 Before the War

「ここは……」

伊奈帆は体を起こし、周囲を見回す。高架下だ。日陰の地面は温く、水面は小波を立てている。煉瓦壁の割れ目に植物が覗く、見慣れた通学路。

どうして、こんな所に倒れているのだろう。日射病だろうか、と額に手を当てる。熱はない。脈も正常。気分も悪いわけじゃない。しかしひどく落ち着かない。例えば、遠足のあと家に着いて、何か忘れものをしてきたことが分かるのに、それが何だか分からないような。忘れてはならない何かを忘れてしまったような空虚な感じが胸にある。

「何だろう……」

影の中で、じっと思考を続ける。課題か。それとも何かの予定か。そうではない。多分、もっと個人的な。

誰か。

バリバリバリ、と引き裂き砕く牙のイメージ。砕けたのは――。

——淡色の月。

伊奈帆は日向へ走り出す。強い日差しに目がチカチカし、首を振る。目の上に手を翳し見上げた昼の空には、半分の月が消え入りそうな儚さで欠片を纏い浮かんでいた。それを見ると、胸がざわめき喉が渴く。何かがあるのに、掴めない。月に向かって手を伸ばす。

その手に強い風を受ける。夏の終わりの風は熱く、そして湿って粘度がある。この風は、前兆だ。嵐が来る。もう、すぐそこに。

ED 1 「夏の夢」

↓ 追加
ED 8
p.90

The Hanged Man

コッソ、コッソと踵が床を打ち鳴らす。狭く細く暗い通路を進んでいくと、刑務官の白いシャツが浮かび上がった。

「界塚少尉」

彼の敬礼に応え、額に揃えた指を当てる。扉の開錠。手を掛けると、刑務官は背後に続こうとした。首を振り、それを断る。

「一人で大丈夫です」

「しかし、危険では」

心配そうな表情に笑いかける。

「そうかもしれない」

言いながら思う。笑顔を浮かべることが、こんなにも難しいとは。

「でも、二人きりで会いたい。弟だから」

界塚ユキ地球軍少尉は、地球連合軍極秘施設、ワンウェイミラーに囲まれた面会室の

内側へ足を踏み入れる。

沈黙。

テールブルに向かい合わせに座るのは、囚人服を身に纏った火星騎士。

界塚伊奈帆。数年前に生き別れた、ユキの弟。彼は背筋を伸ばし、伏し目の無表情で何も言わずに座っている。

ずっと探していた。でも、どこにもいなくて。生きてはいないかもしれないという思いが日に日に強くなっていた戦時中。地球に対し宣戦布告を告げた火星騎士総司令官の傍らに控える、騎士の姿が目に焼き付いた。

なおくん。伊奈帆。弟だ。見間違えるわけがない。

それからは奔走の日々だった。一介の軍人でしかないユキが、事実上火星元首の側近に対し、何の働きかけができるはずもない。

戦争が終わり、戦闘状態にあった火星騎士の多くは地球連合軍に捕らえられた。捕虜として収容される伊奈帆に、ようやく面会が叶ったのだ。

生きていたの？ どこにいたの？ どうして火星騎士に？ 私たちを敵に回したのはな

ぜ？ 地球を裏切ったの？なぜ、投降したの？なぜ――

ユキは唇を噛む。

聞きたいことも言いたいことも、たくさんある。聞かなければならないこと、聞き出さなければならぬことも。でも、どれも口にする勇気が出なかった。徒に、時間だけが過ぎていく。

「……何しに來たの？」

声に、ユキは顔を上げる。伊奈帆が、橙色の双眸でユキをじっと見つめていた。

「ユキ姉。しばらく」

「なおくん……」

伊奈帆が浮かべた小さな笑みに、涙が零れそうになる。もう、変わってしまったのだと思っていた。自分の知らない人間になってしまっていたかと。でも、そうじゃない。私の、たった一人の弟だ。

さまざまな巡り合わせの結果、私たちは軍人と捕虜として、正対する立場で座っている。しかしそれは、結果でしかないのかもしれない。今はただ、生きて会えたことが嬉しかった。

しかし、いつまでも感傷に浸っているわけにはいかない。ユキには任務がある。それを果たさなければ、この先ユキは、伊奈帆と二度と会うことができなくなってしまう。

ユキは意を決し、口を開く。

「スレイン・ザーツバルム・トロイヤードの所在を教えなさい」

伊奈帆の瞳が、ほんの僅かに細くなる。任務で会いに来たことを、こうして突きつけるのは辛い。落胆を滲ませた、悲しそうな表情に胸が痛む。

「断るよ」

「よく考えて。彼を捕えなければ、あなたが……」

ユキは口を噤む。その先を言ってしまうと、現実になるような気がした。

お願い。答えて。そうでなければ、彼の代わりに、あなたが全ての責を負うのよ。

心の声が聞こえたように、伊奈帆が、うん、と頷いた。

「それでいいんだ。だから、僕は降伏した」

「え？」

「スレインは渡さない」

強い声と瞳で言われ、ユキは言葉を失う。伊奈帆は自ら捕らえられ、トロイヤードの

身代わりに？ つまり、この交渉は初めから決裂していたということ？

やりきれずユキは唇を噛む。弟が、誰かの為に、自分を犠牲にするなんて。私は、あなたが大切で、心から助けたいと思っているのに。

「なおくん、どうして？ どうしてそこまでするの？」

悲鳴にも似たユキの問い。伊奈帆は、天井の先の空を透かすような遠い目をした。

「蝙蝠じゃない。狼でもない。空と海の狭間を飛ぶ、白い――」

呟く言葉は消え入り、最後の方は聞き取れなかった。

「命を助けられた。スレインがいなければ、とくに僕は宇宙の塵となっていた」

ゆっくりとした瞬き。その瞼の裏に、何を見たのかユキは知らない。

「僕の命は、スレインのために使おうと。その時に決めた」

界塚少佐、と伊奈帆が呼ぶ。

「話すことは何もない」

さようなら、と伊奈帆は告げる。満足そうな微笑みで。

This side of Paradise

「伊奈帆、遅いな」

カームがデジタルウォッチの時刻を確認しつつ呟く。現在時刻は一時八分。待ち合わせ時刻は午後一時である。時間に正確な伊奈帆が遅刻とは珍しい。というか、前代未聞だ。

「そっち、メール来てる？」

ライエの言葉に、韻子が端末を確認した。すぐに首を左右に振る。

「ううん。何かあったのかな？」

「あ！ あれ、伊奈帆君じゃない？」

ニーナの指さす先を見ると、走り寄る人影があった。

「スレイン君も一緒だ」

四人は顔を見合わせる。これで全員だ。

「お待たせ」

「ごめんなさい、遅くなってしまつて」

全力疾走を見せた二人の、肩で息をしつつの第一声。カーム、韻子、ニーナとライエは相変わらずの二人の姿にそれぞれの表情で笑う。デューカリオンでの日々が、懐かしさを伴い蘇る。スレインは最終戦で負傷し入院していたため、今日のことは連絡だけに入れておいた。元気に走り回れるくらいには快復したらしい。

「遅刻なんて珍しいわね。どうしたの？」

伊奈帆がスレインを指さした。

「コウモリが、コートも手袋もマフラーも無しに出かけようとするから」

三人は二人の服装を改めて見る。伊奈帆は明るい色のダウンジャケットにマフラー、手袋の完全防備。スレインはマフラーと手袋はしていないが、丈の長いウールのジャケットは暖かそうである。

「オレンジ色が寒がりなんですよ。こんなに着込んで、暑いくらいです」

スレインは呼吸を整えつつ顎を拭った。顔色が変わらないので気づかなかったが、額に汗が浮かんでいる。伊奈帆は勢いよくスレインに顔を向けた。

「暑い、だって……？ 迎えに行ったら裸足だったよね？ 信じられない。見ていただけ

でもやけになる」

お家まで迎えに行っただあ、とニーナが呟く。カームは再び時刻を確認。片手で進行方向を示す。

「それより早く行こうぜ。始まっちゃう」

「うん」

韻子、ニーナ、ライエが前に、カーム、伊奈帆、スレインは後列になって、六人は固まって歩き出す。

アルドノア一号炉竣工記念式典。

起動するのは、ヴァース帝国女王アセイラム・ヴァース・アリュシア。火星女王の正式訪問。終戦記念式典としての意味合いも強い。

会場には、円形を組み合わせた建造物にレッドカーペットが敷かれていた。ステージの中央に設置されているのは、起動前のアルドノア・ドライブ。

「セラムさんから、僕らのこと見えるかな」

群衆の中で、伊奈帆がスレインに話しかける。スレインはアルドノア炉を見上げたまま、はにかむように微笑んだ。

「見つけてくれたら嬉しいですけど、別に、いいんです」

スレインが胸元で手を握る。彼の癖だ。伊奈帆は彼の服の下、ペンダントの存在を思う。

「姫様がお健やかなら、それで」

「ふうん」

コートから覗く素肌の首元は白い。筋張って、影が濃い。こんなに細い首だったろうか。

「うわ、何です？」

ぐるぐる、ぐる、と伊奈帆は彼の寒々しい首に自分のマフラーを巻き付けた。

「風邪ひくよ」

「いや、暑いんですけど……」

さらに結んで、ぎゅ、としめる。スレインは情けない顔で伊奈帆に向かって口を開こうとする。

「あ、お姫様！」

カームの言葉に二人同時に前を見る。白いドレスの女王の姿。しずしずと赤絨毯を進

み、起動装置の前で観客へと身体を向けた。

「セラムさん、元氣そうだね」

「はい……」

重ねられた左手にある指輪に、寂しさにも似た不思議な心地になる。彼女の手が、アルドノア・ドライブに触れた。球体は光を宿し、その輝きは広がってゆく。

「この輝きが、地球とヴァースの平和の架け橋になることを願って」

アセイラムが顔を上げる。記憶の中より強い瞳は、真っ直ぐに。

「目覚めよ、アルドノア」

そう。未来を見つめている。

式典が終わり、連れ立って歩く仲間たち。韻子がぐるりと振り向いた。

「これからみんなでうち来ない？ サービスするよ」

「やった！」

「あたし、初めて」

「韻子のご飯、美味しいよお。食べ過ぎちゃうかも」

韻子の実家は大衆食堂。戦争が終わり、毎日顔を合わすことがなくなった自分たちの溜まり場になる日も近い。

「スレイン、行くよね？」

伊奈帆が声を掛けると、スレインはぱちぱちと目を瞬き、やがて明るい笑顔を浮かべた。

「はい！ ありがとうございます、伊奈帆」

「……別に」

伊奈帆はそっぽを向いて小さく答え、次にスレインの首元に垂れるマフラーの端を引っ張った。

お楽しみいただけましたでしょうか。

このような話を本腰入れて書くのは初めてで、自分でも次どうなるんだろうとワクワクしながら書きました！どのEDも解釈と戦いながら「これや！」とキーボードを壊れるほど強く押し込んで書き上げていますので、エンディングにハズレはないと思います。

みんなどのEDになったかな〜と気になるので、読後に一言教えていただけると嬉しいです。個人的にはED7が好きです。辿り着けませんでした（自分でやったらED1でした）。

お読みいただきありがとうございました！

イメージソング

「はじまりの国」 Peaple in The Box

The call of summer

発行 Scramble/鳴海

発行日 2023.11.12/ZERO の方舟 15

印刷所 (株)しまや出版様

Mail jjncg720@yahoo.co.jp

X (Twitter) @narumiblue

Pixiv ID 955950

本作は制作会社、関係者、及び関係団体とは一切関係ありません。
無断転載、ネットオークションへの出品などはお控えください。